

第4回「愛猿記賞」（エツセイ部門）【佳作】

「豆まき」 東京都 平野由希子

祖父は昔からの習わしを大切にする人だった。季節の行事なども人任せにせず全部自分でやっていた。正月の松飾や小正月に飾る餅花や団子も自分で用意し飾りつけをしていた。

節分の豆まきも、自ら率先してやっていた。

夜、祖父の家に行くと、すでに飴玉や金平糖や落花生などが入ったザルが用意されていて、祖父がその前に座っている。みんなが集まるのを見計らって祖父が立ち上がり、お菓子の入ったザルを持って座敷に行く。みんながそのあとからゾロゾロついて行く。

お菓子をわしづかみにしながら、祖父が、「鬼は外。福は内」と言いながらお菓子をまくと、みんながワッとばかりに飛びつく。座敷に仁王立ちになり、ぶつきらぼうな口調で、「鬼は外。福は内」と言いながらお菓子をまく祖父の姿は、なかなか威厳のあるものだった。

子どもだけでなく、大人も一緒ににお菓子を拾うのだが、わたしの母などは前掛けを広げ、子どもたちを押し退けるようにしながら捨い集めていたものだった。

当時、私の村ではどこの家でもこのようなことをそれぞれの家でやっていた。祖父も子どもたちを喜ばしてあげたいという気持ちも少しはあったかもしれないが、昔からの習わしを家長の務めとしてやっていただけであつたのもしれない。

祖父は私が十一歳のとき亡くなつた。気難しい人で子どもには近寄りがたいところがあつたが、意外に自分の中で大きな存在であつたことを知ったのは、自分も子の親となり、

昔のことを思^{おも}い出すようになつてからだつた。

自分の子ども時代を思い出すたび、その中心にいつも祖父がいたことを思うとき、その存在の大きさに改^{あらた}めて思いをいたすのである。

祖父に倣^{なら}い、自分も昔の習わしを子どもたちに伝えようと思い、節分の日にお菓子やキヤラメルなどを用意し、「鬼は外。福は内^{おにそとふくうち}」と豆まきをやるようになつた。最初、キヤツキヤツと言いながら喜んでいた子どもたちも、だんだん年齢^{ねんれい}が上がるにつれて親の思いつきに付き合つてくれている様子がみてとれたので、お菓子と一緒に十円玉や百円玉を紙に包^{つつ}んでまくと、俄然^{がぜん}、顔つきが変わり、上の娘などは十円玉には目もくれず百円玉に狙^{ねら}いを定め、必死^{ひつし}の形相^{ぎょうそう}で拾い集めていた。さらに五百円玉を数枚加^{くわ}えると、夫も参加^{さだ}し、腹^{はら}ぱいになり、子どもたちを押しのけるようにしながら両手を広げ、手当^{てあ}たり次第にかき集めていた。

下^{した}の息子はまだ小さかつたので、楽しそうにお菓子を拾つていたが、その息子が小学校高学年^{こうがくねん}になり、「来年からもうやらなくともいいよ」と宣言^{せんげん}したので、我が家の中行事も自然消滅^{しぜんしょうめつ}のような形で終^おわりを告^つげた。

祖父が亡くなつてからすでに半世紀が過ぎた。歳月^{さいげつ}とともに記憶は日々色褪^{いろあ}せていくが、座敷に仁王立ちになり、ぶつきらぼうな口調で、「鬼は外。福は内^{おにそとふくうち}」と言ひながらお菓子をまいていた祖父の姿は、いまも鮮明^{せんめい}に心に焼きついている。